校異
叢書
七修日記

校註土佐日記序

世學者讀土佐日記者或以紀大夫劫於海賊論封建制者有之或併古今集大井川二序論文章之法定於大夫者有之或謂是紀行也非日記也且以此書為日記始者非矣況等立論其言人人而殊余則獨嘆焉卿談天之章在我東方實為千古佳話然啟此記誰能詳卿乎得大夫渺茫望海之恨或不多

齎是卿雖不得歸猶歸也藤翁在時每過余而飲必及此事矣初翁校註之也余聞之其家人翁起必曰日記出入飲食無不言日記日記必曰日記坐必曰日記出入必曰日記者乃知翁畢生之志在茲雖有志未遂其助不易於遺成也翁則前有本居老人挽之後有大平有信猛彦諸子推之今又其門人為先師竭力校梓遺書使翁之為大夫盡心者傳千歲而不已是

翁雖歿猶不歿也余老儒也常訓人以忠孝之道故嘉其事序而道之翁名磯吳尾張國中島郡起驛人

文政紀元戊寅冬十月

尾張 秦鼎撰

尾頭備書

翁の初より終迄を一部の物語といふものと書なし
るふたのくまでみることゝする事にあて
よさあることもとゝなり候をもよう
いづれもいとゝみづからがかきをきていま〳〵乃
きでしき候字もかきつゞけるはいでふこのよ
三本かむがへていさゝのもすとおもか
ゆるを本紙といふなどやある我をおもの

中間（ナカラ）まで綴（カタベラ）小さくおどもせをあるを〳〵
其ことゝ本紙の事柄のいとをされく紙ゑが
多くあるおとゞもおよ多くの事柄の大人のたゞ
志き説をはず見（モガラ）侍のさとりやきさ月に
かしら書よ百首なふてまゝ紙示し給を
このぞいこゞき時をゝひをゝまゝとゝまゝか
をおとゝもかきつけぬ又この外物どもに

古事（フルコト）の中にはよしなどむつかしくいへる事を更に
きびしくいふ事もいらねど初まなびの
ためにかくはかきしぬ

藤原城足

甲斐などいふかなしたるを古の
かなさまにせうをしたるハ一つ
の例をあるにしたる也又下文
承ハおりしろき事ハありけるを
附べし
○かどで其時よりまへての跡ふ
田舎のあとの所をいふへたゝ
へ己師のちる紀行貫之九条
又古今集を読みし者康
秀の二所のぞうようすてく
だる時の小野小町の何れて
し手をとる事たるふまく
ばしかたきとハ紀氏のもまた
をさしていふ

解由とハところとハ租税をと
さめて解由状といふ者人
より解由状といふをとる
るなん今の世貢物の証
文目録をとるなりん

土佐の日記

貫之延長八年任土佐守兼平四年より五年の任限満て京に帰らるゝ時の南海船路の日記なり

をとこもすなる、（抄をとこもすといふとあり附来いまのごとし）日記といふ物を女もして
みんとてするなり。（抄女もしてこゝろみんとてとあり附来いまのごとし）それのとしの、（抄ナシ）
十二月の廿日あまり一日の日のいぬの時にかどです。
そのよしいさゝか物にかきつく。ある人県（あがた）の四とせ
五とせはてゝ、例のことゞもみなし終（為）て解由（げゆ）など
とりて住（すむ）館（たち）よりいでゝ、船にのるべき所へわたるが

のもとゝて人の餞別
いろ〳〵の物ども
つかはすとて
るのもとむけの餞別

ゐ三日。和泉のくにまでと、
とたゞうつゝに祢ぎ
とあり今ハ附よう
ものとりつゞけ
いとあやしくまだ
人ふすまでたゞうつぶと祢ぎいたり。抄素。和泉まで

ゐ二日。和泉のくにまでと、
とたゞうつゝに祢ぎ
とあり今ハ附よう
ものとりつゞけ
いとあやしくまだ
人ふすまでたゞうつぶと祢ぎいたり。抄素。和泉まで

ゐ三日。山崎をいでゝ
とゝろ八木とも
さだめず〳〵
このはる人ふもあ
いまの
ごと〳〵
きやうふて。
とゝむけしたり
今ハとゝたゞ
ゑ
んぢるなんさけ
もぬるをとあり素今のごと〳〵
てうむるふし
をあそび

ゐ三日。山崎をいでゝ
とゝろ八木とも
さだめず〳〵
このはる人ふもあ
いまの
ごと〳〵
きやうふて。
とゝむけしたり
今ハとゝたゞ
ゑ
んぢるなんさけ
もぬるをとあり素今のごと〳〵
てうむるふし
をあそび

古ハ国毎に国分寺といふを建てそこに講師をおきて国中の僧尼の司とし教授とせしものたるべし

しらぬものしが足をこ抄よ紙の字かといへど古本ハ何レも何れの文にもえぐねいひがたければ助字なるべきか猛者云追考あるべし

守とハやがて之にかはれる新任の土佐守之派ともきこゆべし

あるじとハ饗應(モテナシ)なり

廿四日。講師うまのはなむけしにいでませり。附新日うまのえ於むけしにいましとあり抄素今のごとし　ありとあるかみしもわらはまで酔しれて。一文字(イチモンジ)をだにしらぬもの。しが足は十文字(モンジ)にふみてぞあそぶ(附ナシ)

廿五日。かみのたちより。呼に文(フミ)もてきたれり。抄きたりとあり附素今のごとし　よばれていきて抄素あいたりてとあり附いまのごとし　日ひとひ。夜ひとよ。とかくあそぶやうにてあけにけり附うとかくあそぶやうにてとあり抄素今のごとし

廿六日。猶かみのたちにて。抄たちにてはる附たちにとあり素今のごとし　あるじしのゝ

しりて。附素あるじのゝしりてとあり抄今のごとし　郎等(カツコ)までに。抄をのこどもまでにとありまたいまのごとし附郎等まかづけたり。詩(からうた)こゑあげていひけり。素こゑありて附と忘小あげてとあり抄いまのごとし　やまとうた。あるじも客(まらうど)も。他(こと)人もいひあへり。附素あへりけりとあり抄今のごとし　からうたはこれにえかかず抄これよえかゝずとあり附素今の世　やまとうた。あるじのかみのよめりける

みやこいでゝ君にあはんとこしものをこしかひもなく

わかれぬるかな

となんありければ。帰る前(サキ)のかみのよめる

しろたへの波路をとほくゆきかひて我に似べきは

かづけハきぬなどをあたふるにて今の引出物の也〇声あげていふハ詠ずるをいふただよ吟ずる也

古伝本大抵為相大ほいれふの右の小府より今の所二里ばかり西南のつゝみにて出船うつ戸八音門歌にて大ほう東へ二里だろうと二六左末字百枚の歌ノ説ノ

訳するおとこ人このもかくれどさうしさもぬる
べしとかくいひていでたつおのもの(皆)も今ぞもとろともにおもほえて。
きえのもいのちもがなとぞ(抄末今のもとより附今のごとし)
ふんだゞける事さそいでふくり
廿七日大津より浦戸をさして漕いでゞくあるうちふ
抄かくするとあり(ミヤコ)京にて生まれて(ウンだ)女子。(抄うまれやとあり附末今のごとし)
あてにもあらぬをいだきてかへるに(抄附ふとそとあり末いまのごとし)
いそぎとりていぬ(抄のるもいぬ附なふごともいぬそとあり末今のごとし)

ゐどのふるふとの略ふて同ゐ

ゐる人ことに(抄附ふるにとあり抄末今のごとし)

ゐることをゐんをゐ定俗ゐのいもぎも同しまるゐれる今俗のゐ発なゐをゐたがへて

ある人ことに綾ふゐる今をゐふ

いづもふてもあるべゐれどいまハ末による(附なきことの)

こゝそとある抄末今のごとし

ある人のかきて出せる前

こゝやおへて帰るふとんるのなれのらぞ

こゝやおへて男ふもすゐふさハかゐてゐる人乃

あまぞなをゐりぞ又ある時ハ

あれこものとうすしてゐる記人をいづこ(くま)とゐふぞ

うゐしうをけるぞといひてゐるあひだふ麻(カゞ)の袴の後ろといふ前に。

附ふて二所ふいるにとあり抄末今のごとし

ものそ(凡)ゐ(第)ゐ又まこ人こをゐれ酒なにゐ

くち畑六畑もろ打六打ねふていてたさるり畑を打人一てゐるひもそうもろうぐ
ろうと人々ゆうゆうそよそよ出さう舟を海あの目うろおかてたゝれるやくゆく
と所のおろろ土一色の花うるべし

そでおひ来て。秋来ぬと行かひ附今のごとし
まごうる死ことをいふ。附おりおその次ようけのことをひてとあり系秋ふ
もたちの人々のるふ。ひとる人こぞ。ふあるやうにいひて
まこれ絶えぐくくとうしがうくいひけくの人々のくつ綱も
ろろともふて。秋ろろともふて。を附来今のごとし いうこべおてふあひ出せる歌
をーと男子人やとあー鴨のうちもれてる秋
まこれにけまでといひてありろれぞ。甚痛感いとくく紙ふで。
あくく人のまんまけるる

梅さをぢくそおひ来ぬとふこれぬとるつこの源たころを
ろふみるうれ。秋をあひもちねと
を附来今のごとし
あまれと志ーでおのまー酒とくくひつまでばやくいん
やでぢちぬ風もふさねべーとうびばれふりんと
もでけをもにあるふーにつけてぢーふ。時ふ
仰つうきうふ又あるふ。面ぐふまど甲斐ふれどいふ。
ぬくうたふよ。秋山辛夷の花も一ちまくろもたぐよひぬ。
とぞいふおよひ浦戸ふとする。義承言実楫季(スキヒラ)衡。

甲斐ふ六古今集かひをうやゝえーうきかひうもを祝こ一山ふ六
風をうこ六筑紫の風うきをりておもひ出てふふうんどうひうるべし
○震公義歌銘今深上塵、起まこ春青という六の声振林木響退行雲、
るこ今海の古事とりて

此より附抄にくはし
大湊とさしておふといふ
ことを略きていへるなり
といへるを和本ハおふに八
きこえぬ云々されど旧
説ハ追風に泥せて舟を
擁ぬるとの方ふにいふこと
あまたなるべし
○はやくのかみと八前の守のおの
の子孫をいふ人の子なりとい
彼の家に傳ふるなるべし

こと人〻もありけり
廿八日。うらどよりこぎいでゝ、大湊をおふ。このあひだに、はやくのかみの子。山口千岑。さけよきものどももてきて、ふねに
いれたり。ゆく〳〵のみくふ
廿九日大湊にとまれり。くすし。ふりはへて。屠蘇白散
さけくはへて、もてきたり。こゝろざしあるに似たり
元日。なほおなじとまりなり。白散をあるもの。夜のまとて。ふなやかたにさしはさめりければ。風に吹ならさせて。

猛見云坂田先生の説追考
え入るべし
坂田先生ハんながらしえらるめ
るなし　さて右抄に延喜大
膳式に正月元日諸王侍臣料
供菜料に芋いもあらめを用
ゐらるゝこともありと記し侍れど
も此料ハ正月八日また元
日より用ひ出べしと思ひれど芋
もあらめもえならめに
わかめのことなるべし
○おし鮎をすふにいひし鮎と
あれど押鮎元日に用ひ侍る
ものよし江次第にもみえた
るハおし鮎なるべし　さてはを
もつくハをこしらへてハな
きをあまたこの人の口を
たりふれたるなるべし

海にいれて。えのまずなりぬ。芋もあらめも。はがためもなし
抄にもしあらめもたぐひめ附芋しあらめ坂田考芋もあらめも坂田考とありて三本おのく見え今は三本の見られどとりて本行のごとくせり
かうやうのものなきくになり。もとめしもおかず。たゞおしあゆのくち
をのみぞすふ。このすふ人〻のくちを。おしあゆもしおもふや
うあらんや。けふは京のみぞおもひやらるゝ。九重の門の。しりくべ
縄のなよしのかしら。ひゝらぎら
抄ここのかどの附このかどとありてかどの八形し今八素ふによる
いかにぞとぞいひあへなる
素ふひゝきらとあり附抄今のごとし
抄素いかにとぞとあり附今のごとし
二日。なほ大湊にとまれり。講師。ものさけおこせたり
附新日とあり抄素今のごとし

（いさゝけさぶらひの返礼のさかづきをさゝげさせんがためとのこと）

○ふぐ（ふくとうをかきわけもあるべきをかれこれいふ）

○まろ（麿）曲（ゆが）く（ママ）

（おあげよとこそうれひて曲（ゆが）ふべきなり）

二日。おきて漕ぎ出でむとするに風なみのたゝ（附まヽ）ねば。とゞまりぬ。

ところやあらんとなむ。

三日。風あけぞ。え出でたゝぬ。

四日。風なほやまず。酒よきものたい（て）ぜむ人（小附まさうやうとあり抄今のごとし）ゝもえあらで。いさゝけさゝせ（附まヽ）ばかりにて。

なれど。よろこぶこゝちもせず。

五日。風波やまねば。なほおる（ゐ）（ママ）ぬ人ゝ絶ぞやうふらひふく

六日。きよふのごとし

七日よなりぬおまへ（ママ）ぐこうひおるし。（附素白（ママ）ばるをとあり抄今のごとし）たゞ波の白きのこぞみゆる。

くるあひだ小人の気色ありひざ（ママ）ゝ名ある所ぞ。鯉をなくて

（素鮎とあり抄附今のごとし）鯽（フナ）よりはじめて。門のもこと物も。そ

極（ま）ことあるひとゞ（ママ）もあてゝ。

たる。哥あまたよめりの

淺ゞ（ママ）しなをも（ママ）ふかしあれば水もなほ淺からじ

（鮎鯉ともに名産の由追考之合考）

（附おこせたりの次に「ふりはえてうぐひ（ママ）ぞ見ゆつけたり」とありまた抄文通あるもよし）

（附素今のごとし）ある人のいはく、

をとこもすなる日記といふものを、をんなもしてみむとてするなり。それの年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。そのよしいささかにものに書きつく。ある人、県の四年五年あひなれつかうまつりて、その国の事終へて、解由など取りて、住むべき館より出でて、船に乗り移るべき所へわたる、その間に、国にある時の人、上中下、送りしつれば、別れがたく思ひて、日一日とまりぬ。

（附素今のごとし）ある人のいはく、

をとこもすなる日記といふものを、をんなもしてみむとてするなり。それの年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。そのよしいささかにものに書きつく。ある人、県の四年五年あひなれつかうまつりて、その国の事終へて、解由など取りて、住むべき館より出でて、船に乗り移るべき所へわたる、その間に、国にある時の人、上中下、送りしつれば、別れがたく思ひて、日一日とまりぬ。

（附素今のごとし）ある人のいはく、

をとこもすなる日記といふものを、をんなもしてみむとてするなり。それの年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。そのよしいささかにものに書きつく。ある人、県の四年五年あひなれつかうまつりて、その国の事終へて、解由など取りて、住むべき館より出でて、船に乗り移るべき所へわたる、その間に、国にある時の人、上中下、送りしつれば、別れがたく思ひて、日一日とまりぬ。

（附素今のごとし）ある人のいはく、

をとこもすなる日記といふものを、をんなもしてみむとてするなり。それの年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。そのよしいささかにものに書きつく。ある人、県の四年五年あひなれつかうまつりて、その国の事終へて、解由など取りて、住むべき館より出でて、船に乗り移るべき所へわたる、その間に、国にある時の人、上中下、送りしつれば、別れがたく思ひて、日一日とまりぬ。

まくてふことをとゝ

ふてよまへうバ。附よこ〳〵うふ
よゝうバとあり抄素今のごと
あゝるんとゝもよみてよゝ（附素ナシ）
仮いづもおて
まゝべ〳〵ある人のよめる　抄素よゝうけることあり附よゝの二字
抄今のごと〳〵これもいづもおてゝ

照月の流るゝうれぞあるのこいづるみ
海ふざりけるよゝ　附よゝの二字
抄今のごと〳〵
九日ぴと知て大湊よ
こぎいでゝ。これを
又おくりてくる人ぁあるたる井して。附素ぬひ出てと
あり抄今のごと〳〵

抄素ぬんの二字なし（附ナシ）

附よゝおひくるの次ぬ
ふぎゝあゝ人ありくはとあり
抄素今ありてゝろゝ〳〵と
よゝでゝあゝゝぴ同一緒のく
だゝゝぴれぁるぎぬまるべき

そゝぞるりぬゝりぬべ〳〵と
あれバたゝうれゞるゝ文
ざゝりもあろまゝりぬべ〳〵
とゝらくべ〳〵

楫取衛長谷影行改らる。抄出たゝゝゝと
で始一日よ更。抄出ナシ　附素いまのごと〳〵とあり
附よゝとゝ〳〵

添さんざ〳〵ぴ海ゝおゝ
なれてもくこれを見おろ
かくてこぎもくてゝくぴ人ぐもゝおひ来ける
まゝ人ゝとあり
抄今のごと〳〵　並く彩りぬ。れ
ふ事ゝるべ〳〵。れ
ひゝと楫ごふ〳〵てやゝゝ。

舟人ハ船うど云ふもの舟にある人々をも舟の人のと云ふ同じ

男ひやるこゝろハ海をもくろんでふく（附表ハ誤リ抄今のごとし）
ゐるべきやうもなし。いとあやしくそれのうぞ。いくそばくいくそばくみとも知らず。そこともおぼえに浪のたつ。ちぬ（ヂ）のこびふかし。ろしゝとつゝるにそくどしてふく人のこゝろ
男わろせバ我のうま（未）ごとにすむ物ふかゝのどちこそ
男ことなる事もなくてにく。附おなにとあり抄表今のごとし山も海もこゝろ

てい気（天氣）ハ天気をいひつゝけ風ハ船うどの方をのみをこゝろてその
すゝむるものゝふをこゝろてその
おさゝぬかぢとりなどハ云ふ

さるべき人ハ風をまちなどして日ごろ経ぬれバ（ヘ）ておやの（ら）んのこゝろと昨の夜ゝさて

こゝろ悪ふけてゝ雨もんがしもふてゝ（ヂ）ていけの（天氣）事ハ
ゝ男のこゝろ（ハ）知せ（ら）ん（抄てい表ハ（ヒョリ）表ハ（ヒョリ）あり附今のごとし）をのこもなゝ
ハねをゝいもんだそ（ら）ゝ。ゝて女ハ（ら）れ庇かし（ら）とにさ
あそ（ら）ゝ。ゝとのこそ（ら）ゝ。ゝく男へぞ。ゝれ（ら）ゝ。ゝちとりハふる
ゝうゝうひて船ふ（ら）ゝ。ゝも男（ら）ゝ（附表ハ（ら）ずぞとあり抄今のごとし）そおゝふ
ゝ（抄今ハとあり表おゝえの字）

男の船をゝてゝ（若）ゝ（薄）ゝるとゝるくゝ。ゝず（ら）ゝ紀ゝてゝ（ら）ゝるく。
抄ゝすゝさゝゝゝゝるとゝるくゝ。ゝず（ら）ゝ紀ゝてゝ（ら）ゝるく。
ゝるくゝとあり附いまのごとし

くろつんぼは収てくろつんぼのさ
かさくべー
○いろ附抄ともに一首
二首ともいろもし附ながらあん
までを一そへてかくやうに
おかうらくいくれつさごおの
もかてやはとのおおつき
よんべうをあかるべく
ほふれいうあん
○うねもいうねおいてもそ
あて女をえくをれがえん浅
もくでうろう華ふ
うるべー
○おさのりハ駄賃のなのさ
小て価をやるで雪うをいふを
附抄ともみとうり又ふうなる
浪の辺はかまうさごといの
よべねをうひて又の日みかふ
うさよ出て使をやねとる
ぬいさまでもまさでも

あてとえんやくてんぴょんぴょんぴょんのうねもが華を
附うういもがるとふよべのまを〜て　抄今のごと〜　抄こてん　素は一句あり　附抄ふあり　そ〜もさ〜
うねおうごの文字まあ〜抄今のごと〜
とて。おぎのはさとて浅もとてもおべおはまごに
人めもふをこさ。ぱいあるよどんはすこ〜おごねお。
かくうくて。ぱいあるよどんはすこ〜おごねお。
あぞ。これおうこいに会うまどめず。抄これるべをんど　とあり附素今のごと〜　とて〜
たう会えおとう。附素今のごと〜　抄ふあり　あるづねうふ。附素今はあおのう文字〜抄ふあり　ふまる〜抄ふろにう
あてちあ〜こ〜て。附こちあ〜まて　あり抄素今のごと〜　ねもとの〜　給　ただで。

家はそうろうなどを附のべえ
あ〜ぬ抄ふ素今のごと〜
とつてうさ抄ふ海ふ法の南海
をひるれバさまえ〜

今〜のにハおのまえ
えねいひごうれど動体る
ばべー
古今集
いまはとひのものを
さこにのころろかかう
われをなおも

えてすりぬ　附素抄ふ
十日。昨夜のとう
十一日。あうつきに
たまバ海のありさ
見て旅。西をとバ
あ〜ひ。俗の事と
ぬよさうね。えさう
うの翔林のやう

事もなれば人々もの
いふとなり

おのおのにて名ごりおしがりて
送へもがうでぞいひける
送へもがなと思ふなるべし又昔のことなり
げに思ひて人々ものよりなどいはあるべし
ついでおぞ又昔の人を思ひいでて
詠かうよみてぞ母の歌しもいとよろしかりける

のごとくなり時の人乃歌たゞねばもれ
でおほくなるべし
春日に思ひあれどもなほ思ひ出でぬべき人のこと
思ひなどするほどにいひつゞけん
十二月廿日あまり文時維蔵うれのおくりもの
ほどもむろはかさぬ
十三日あかつきに
をとこ女ものゝ湯あみなどせんとてあくるほど

ろこよ雨ふりて由くぢ海をこゆるに
こゝもとゝ我そこもる海士もうらいづまう海と
こてまつまじくぢもん云ふてまつ十日あまりひと月
おとゝゝ日ふる。秋のごとくあり。日より後のごとくて出でゆくに
まの今のごとく。秋よりのちもかくもあること。濃本
雫にておだてといひて。俗語
おとゝ法けてやや秋つ風ふきぬ。鮪
かおもあゝぬぐぢこにあげてこゝろ

ゝこゝは俗語のいひざま
みてこゝろえべくもあゝぬぐ
捨ゝこゝひての法なべゝ
。猛兵云一本ことひてゝ
あり

あゝげ 奥べゝ

おとゝ法けてやうこつけゝ
ゝゝ同じ
。おや 和名抄ゝあり前の
もおゝき捨てゝ師のかゝろ
万葉に出でゝ後ありくぢ
つかゝやのくゝのゝ

ゝゝ俗語のごとくて指ゝさ
ゝゝくゝこゝくて指ゝさ
絞文法けてありとて
いひくゝこゝ師はいぢん
さ物ゝ後て詞ゝ傷ん
らば
ゝゝゝゝ
ありゝ
うをつゝ

舟名
。せちゝとよ 和名抄ゝあり
のゝ 俗語
。おちゝもぬゝとゝゝ
うゝるまゝゝもゝゝの
歌の本ゝりゝゝ

おゝゝ 勝行ゝ和名抄ゝ
古ゝ 和名抄ゝ舟名ゝ

十四日。あゝつゝさゝ雨ふれどもやまず。舟出ださず。
雑 悪 猶 雑
せちゝとよさゝぢとあるふれどもやまず。雨のふる
さゝ物ゝ残るふれどもをとゝりけて。
おちゝもぬゝとゝゝ 俗語ありぬ。 俗語ありぬ ありぬ今のごとく 梶ゝ。
又舟ゝてゝさゝりゝゝ酒ゝむゝくゝる。 ゝゝ今のごとく
梶ゝもゝてゝさゝゝ
十五日。ゝゝあゝつゝさゝ雨ふれどもやまず。
ゝゝ。おゝゝゝぢこゝ

伝知役こもう云の注進七の
十五丁ニ浜川土佐の役ヲ
挙て加久の足をもって行
ニ伊伝留といふ文伊伝知
と同一言おやニ隊いこれ
さ云ふさう然いさるまて
加さの役名ニあらんとぞ
打思ひさるめることれニあ
らく加さの伝名ニまくさ
ひつ

日をくれば附来日をおくれば
ふんのわくもをおいて
ふんでうみ人く海をおぐ名人ぢ
どちまやあ風んでふうひるおとのいとおぐ
十六日風治やまびたおる。雨ともれおだ海の波
なくそいつぐさ記とい云ふ赤おてんと打ふる。
風おくともてやむべくあるふ人のぢ波ふさを
んでよある夢

土佐日記

かぢとりも、こと、もおかしく、なほ、この、ついでに、ある、人の、よめる、

青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

と、ひとりごちて、なむ、いにしへ、阿倍の、仲麿といひける、人の、唐土に、わたりて、かの、国の、人も、みな、友だちに、なりて、年ごろ、ありて、仲麿、国に、出でむとて、船に、乗りて、かの、国の、岸を、出でて、別れを、惜しみて、かの、国の、人、多く、来て、別れ、惜しみ、かの、国の、詩など、作りて、おくれば、仲麿、また、歌、よみて、おくれる、

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

と、よみて、なむ、また、ある、人の、よめる、

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣舟

と、よめり、かく、よめるを、聞きて、ある、人の、また、

天の原ふりさけ見れば大空は海のうちの空を、と、いひたるを、ある、人、また、

いにしへの人も、舟出や、海中空ゆ、ぢざれ、ここを、

秒之間果迚りて於毋のひ
らひてとゝゐ六いとうるさ
二六拍子にて地を踏九
しるまでもなくむこ
なんとそふるべーと帰八い
れさ

いつれもありとの答きを
まうけりといつてかこの
笑話之
○後ち八後くといふんごと
し

多人浴を見てぼうぜんとして海鼠むくいせんどうのごとし
ことをいふ八海の又おそろしきものなるをしれ。
あるそぢ八十八海よりあるこの事なり

我聲の雷といふ拍子ぐのもの浴といづまこれもと
おこり川浴るかぢとをいへ
世二百ばよべのとてまことに浴ることをおひて由ぐのごとくに山
こゝもとゝ九川だうもの浴るをのとゝこそ等より、をさふくあ
ばけものゝ船をこぐごとくぴもぬくとゝあるをうんとて。

あゝとゝこゝ等をそ
こぐてぬくあふ
松八ちゝぞやとぞいへ
うへゝゝ海あつけて
浴とのゝもよへ
まうひめるうる

廿三日。日照てくもりぬ海鼠おそき事あらず。
休日とけをいふる

廿四日。きのふ乃おなじ所なり

廿五日。かぢとりらの北風あしといへば船いださず海ぞくおひくといふ事絶ずきこゆ

廿六日。まことにやあらん海ぞくおふといへば夜なかばかりより船をいだしてこぎくる道にたむけする所あり楫とりしてぬさたいまつらするにぬさの東へちれば楫取の申してたいまつることは此ぬさのちる方にみふねすみやかにこがしめ給へと申してたてまつる。これをきゝて、あるめのわらはのよめる

わたつみのちぶりの神にたむけするぬさの追風やまずふかなんとぞよめる。此あひだに風のよければかぢとりいたくほこりて。船に帆あげなどよろこぶその音をきゝてわらはもおきなもいつしかとし思へばにやあらんいたくよろこぶ此中に淡路のたうめといふ人のよめる哥

追風の吹ぬる時は行ふねの帆てうちてこそうれしかりけれとぞ。ていけのことにつけていのる

てのるとあり抄素今のごとし但二本にはいのるとあるを今いのるとせるは附によれり

抄にちぶりの神は道せやる神なりといへりあるいは道祖の神とも云ふ又海原にもいづくにてもたのむ所の神の始合の神をいへるにて旅行の幸をいのる袖中抄の説なるべし

たうめは老女の称也

ほてうち 帆ぶすあぐる時は手をおろして船の方に檣などの方にて帆をうつといふ事のあるをいひよせたるなるべし

廿七日。風ふきなほりくもしばれつゞきさむこゝろもちのみぐるしくなりぬ。男たちのいふぐさめに（抄ぐさめての項参照）帝よりの日とのゝ給はせたるあるこゝろ（抄し帝よりの項参照）ありしかど猶ふるごとのさまをきてある女のもとへ

日をぐみもえさゝぬ冬ぞちりまがふ花をおもへとなれりかも

などのたまさかにある人のもとへ

冬風のさくらねかせてふきしかばなほ冴返るけさの日和と

てなん

廿八日。なほりもせずくもりくらしてこゝろもちのみぐるしくうちくのどうるさ

廿九日。なほりもせずくもりくらしてこゝろもちのみぐるしくうちくのどうるさ（抄浦ごと昭てとあり抄本参照）のほどに猶ふるごとのさまをきてあるを見て日をかぞへみれば今日ぞ二月（ふたつき）のつごもりなるに（抄ふるれどとあり抄本参照）二月（ふたつき）のつごもりなるしかばこの日のこといひいでゝ（抄本参照）小松もがなといへどもあるかなきかにてこぎ（抄本参照）ある女のもとへ

おぼつかなたれにかたらむ春霞たつをみすてゝかへるかりがね

かへるつらおぼつかなしと思ふらむ春霞たつをみすてゝきつる

○海ならねどもこゝろをやりつゝ

うしねとよめかいふなどゝ
名るなり

こゝろもとなの濱とも日ねと
かるかれどとこたくづ

あるん人（まゝ）のよめる哥

くふるれどとるとも好もなき日数をのこゞこゞわてる
濁るれどいくの心ぞたゆたこゞ由くおもふ心なよ名をそせて。
こゝやいづこゝひれ（附まゝ）ばとさのとまりと我いひる（附まゝ）昔古仁
とひひる哥よ俗る女ばもよ（附まゝ）もまりぞがいひくく。
昔ふぞ〳〵まて赤の名さぐひぞある。（附こゝひわぞとあり抄本今のごとし）あ
れといひてよめる哥

とこを俗〳〵とこゝろの名よ〳〵おくが（附本）有ける活をも

奴許八洲波と絶体よめるの
海中かあるこゝ抄にいり
きもるべし（附）後波あるとも
まだふべうしもせ
○今和歌と四川とうふ
此四五川自々〳〵と抄
にいり

あをれおとそ見る（だり本附）
三十日で雨風ふらぬがいで（附）
て。祝ふうだりに船をぶ（附）
抄本今のごとし〳〵よるうるしバ施（附）
よりもて。いこと（附）をもうりぬ
をる也て田舎海とうふ赤
るぶとうふ海ふ活よ似たる物ふし
けの名んぐ（附）ふるよ似うり。（附本恒よ似うり
とあり抄今のごとし）くふ赤よ

えしそ志りしハえこそそ
あざむりのことの字同し
行ちぬるてハ今もえごを
くけりさあひて人を制し
とゞむる事也

思へることを（附素本に思へることを とあり抄今のごとし）えしもこそしたべとて（附本にえしもこそ言へ抄本）（つゝめくての詞なし又抄本に志のへとあり 字形似たれば志のへとあるよろし）つゝめきてやみぬ。にはかに風波たかけれ
ばとゞまりぬ

二日。雨風やまず。日ひと日、夜もすがら、神仏をいのる

三日。海のうへきのふのやうなれば、ふねいださず。風のふくこと
やまねば、岸の波たちかへる。これにつけてよめる歌

緒をよりてかひなきものはおちつもる涙の玉を
ぬかぬなりけり。かくて今日くれぬ。（附本に今日もくれぬとあり抄本に今日は八日…）

かたゐとハ人をいやしめ
あらくていふ言にて今も
いへり

四日。かぢとり、けふ風雲のけしきはなはだあし（附風のけしき雲のさまとあり抄本今のごとし）といひて、ふねいださずなりぬ。しかれども、ひねもすに波風たゝず。このかぢとりは、日もえはからぬかたゐなりけり（八附素本ナリ乞児）。このとまりの浜には、くさぐさのうるはしき貝石などおほかり。かゝれば、たゞ昔の人をのみこひつゝ、ふねなる人のよめる

よするなみうちもよせなんわがこふる人わすれ貝
おりてひろはん

といへれば、ある人のたへずして、ふねのこゝろやりによめる

うつたくよまれぬのやうなるくらきに
くるまのあやしくくらのやうなるに
くるまそでぐあてりもてきたるに
ものもいはれぬいとあつかはしきに
かもめ絶えおれめでたくあるに
のあるもとよりあるこゝろなるに
いおもとゝ風ふきてくるしがるに
浪とうちゆるんでいひてゆくなの

今ぞそのあはれはしりぬる
もゝしきもかゝるときにぞ
ある人のかくよみてきくべし

さゝよせてはやくよの浪
るべくさゝでよてふて
いふ

松原おほくてくらく浪もとゞろくに
ある人のよめる

今見てぞ人をも松とはしりける

これは神ふるよりありけむ人の歌
もてのびよめる

住の江に船さしよせよ
浪のおとの
声のうちそふ
夜半の月かな

今めくとハんの地よえやう
〜源氏ものがたりにおほくてそ
さるようてみーづく
ムつくれり

とゐる屋ーぬくいひてなうあはくあるありさまゆゑ不
意
ふく風吹てこげどもくきへもゆかでそ退方
おとくくーくうちそよめくものいとくだ後吉
のはの秋ハ後の秋ぞうしほーさゝらの松おそゝこん。
とハ(相カ)今めくもよおっそぬさをたいまつり後へとハ。(相カ)
いつよおさがひてぬさたいまつるぬくたいまつれど。(相カ)
もいと風やうでいやふさよりやたちよ風波のあや
うくれバ櫂とまた又いとくぬさよハ(弘)ぬんのあう秋(い)ハ。

土佐日記

ひさのハ二日二又句と相俗
ーてきくべー
いたくハいたーの誤ニハ
あーざうう

こゝろもちもうれうりおもひたるべきもの。
相俗ーたりの地扱たぶべき
ものとあり素今のごとし
たいまつり後へとハ扱たゞとハつゞまり相俗今のごとし
又いつよおさごひてハ(弘)ぬさよハぬんとてまるこそふさ
あまだでもそ(弘)ハあるかゞみをたいまつるとそ海のようち
まあつれバくらをし(残念)ぬさよハうちつけふ海ハ鏡のごと
相俗の中ふくあり扱素今のごとし
ちもめぬぬるハ(弘)の石をあるこ海ふ鏡をいまて
ぬんうるうるバたくはのえ(相まゝ)すれまゝ岸の松ねるバ

うつくしく八今のふねもろ
同ー

おないよ八名もべくよて
たくりめしいへる人なり 拙
ホ八巨石とかくり

いぶせうつる八金をとる
うつつとてふこ同ー
〇こぎそけのそけハ遠の字
ふてをそけのそけお同ー

いぶせうつる八金をとる
うつつとてふこ同ー
〇こぎそけのそけハ遠の字
ふてをそけのそけお同ー

土佐日記

○こちらくしき八俗ごこゝろく
ーたる人ゆゑいとゞぐ
源氏うゞよくもーき人と
いふも同ーんだらん
○めづらしのまとゝいふこと八
今のまとゝいふことゝ
○幼がこゝろ八年の迎づくえん
ーさにわらふ

やうすぎふちごろりがまどゞ淺路のたくゑんの
今めでゞこゝやまぼこりみよやあくしてあや
ことぶきさせりぬの字

来と来てハ川の堺江の水をあさこゑ
なづむくふるこれやまことをとゝれバよあるべし。
一うまことのあうみバ今もとゝ

とくと思ふ所ありてこめて水のこゝろ
淺さるまくり抄淺ごとくいれおてるべし抄今ハ新ちゃくまで

ぬるよろこびよそ
おとゝりねこさゞいと
入て寢みくり抄こちらへまくりとある抄系今のごとく
八日、枚川のおとゝにて
里たゞぶるこゝよひ
むあるん人あさくう抄事
おとゝゝ男ども云
とゝ

いにぼ八仮粧ゝのべつゝ八
ともゝれ紙ゞ秋の夜と
ゝたゞゞ今度淺ゑ淺
あゝの淡る人ゞゞの
をおゝて返報ゝき地

えくぼをいひだして網物などひの
ゆすりこぼしたるひの
緒ども
ゆゑなるべし
○ゐんとゝるさへ今結ふ
ごとくさのくゝりあり
あるゐんあり河ゐりこゝへ
糸へいとゝんをゆるよい
をぐゝり敷のゆねうちゐり
れを出をえ敷よゆねくふ
ゝて句をそうて書れと活
ゝろいろくむゝる
○あれの西敷二本續ゐ
りゝてあれともあれい
仮名のゆゝるゝり張りる
ゆゝあれい句をあさる
ふゝとゝふゝてゝくさゝ
と活ゝなれゞあさゐん
の帋とゝふ河ゝべゝあゝ
又附よあれのとゝふゝ
あるゝゝれゞ池をゝゝさゝ
ゐれどさゐ地なりのゆゝん
えをゝをゝゝあゝゞくゝ
さゝ句ゝゝゝてゐゐん里ふ
ゝあれゝをれゝ句ゝく

せちゝもゐれゞいをもち
九月。仰とゐるゝにゐ
附のゐゝゝゝどゝあり
抜ゝ今のごゝ
ゝいあひゞふ。和河のとゐ
ゝようゝいをゝあり
抜ゝ今のごゝ
て。ゐをゝさのゐゝにゞ
附ゐゞさの流をえゝゝゝく
あり抜ゝ今のごゝ
おゝゝろゐゐゝる赤ふゞ松の末

どもあり。仲我庭よゞ梅もさゝり。てゐ人くのいえくこゝれ。附
むゝゝゞ名たゝくゝさゝ
附
ゝ設立家業平の中将の老中ゝさゝてさんゝれさうゞ
らゞ書ゝてゝゝゝゞけゝゝまゝどいふ事ゝある赤
ゐゐゝゝゝる人乗ゝ仰ゝる弁ゐり
ゐゐゝゝゝゞ海興ゝある人のゝある
ゐ代弥ゝゝゐ松ゝゞゞまでいゝゝ人のゝゝ附ゝ附ゝ
ゐゝくゞゐゝゝゝゞ又ある人のゝある
ゐゝゝてゝをふるやどゝ物のゝるむゝゝゝゐるかで

苦よて今の返今とゝゝ
河ゝくそのゝさうゝゝのそゝ
ふゞあゝゞゐゝゝゝ四ゝり
ゐゞてゝ少ゝあゝんゝゞゐん

世中ゝのゝのゝゝゐゝ
さゝさゝゝゞゝゞゝゝゝ
ふゞゐゐゝゝゝゞゝゝゝ
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ

奥ゐゝ人ゝ奥ゝゝゐゝ人
をゝふゐゝ

あるいはわらはべなどの（抄本「わらはべ」を「童」とす）
しわざにもあらず。
ともとも。（抄本ここに「かの」あり）
とあり。（抄本「あり」なし）
ばいかぜぞ。（抄本「ぞ」なし）
でわらべのいたくなきければ
さらにいそぐともえいでず。（抄本「いでず」なし）
久しくこの月よおひでて
かえるにぞりうげつ又ある人のいふ

ふるのうらに（抄本「うら」を「浦」とす）
ありけるをいかでかくとも
いふべきとて
ひろひてもちきたりて
ここにかきつけてやる
ふるのうらにおふるなればかくばかり
いつともわかぬこひをするかな
とぞ。
ここにかきつけてやる
ふるのうらにおふるなればかくばかり
いつともわかぬこひをするかな
とぞ。

天ぢくのさるうたのやうにもあらず。
ここらわらはべのなかに
ひとりふたりにもあらず又ある人のいふ
かつら川（抄本「かつら川」を「桂川」とす）
流るべくもあらぬやまもとにも
ありけるをいかでかくとも
いふべきとて
ひろひてもちきたりて
ここにかきつけてやる
かつら川（抄本「かつら川」を「桂川」とす）
流るべくもあらぬやまもとにも
ありけるをいかでかくとも
いふべきとて
ひろひてもちきたりて
ここにかきつけてやる

（抄本「ここに」を「ここらの」とす）

けら人の心もあれたるなりけり中垣こそあれひとつ
家のやうなればのぞみてあづかれるなりさるはた
よりごとにものもたえずえさせたりこよひかゝること、
とこゑたかにものもいはせずいとはつらくみゆれど、
こゝろざしはせんとすさて池めいてくぼまり水つける
所ありほとりに松もありきいつとせむとせのうちに、
ちとせやすぎにけんかたへはなくなりにけり今
おひたるぞまじれるおほかたのみなあれにたれば、

悲しきがなかにとゞむべきを
うちとけたるは女文字にて書たる
故なれば人の子すくなきを候ふ
みてうつしとせしなるべし

このわかきみはよろこびき
く

帰京を人々の悦べる中にて
かなしき人をこひしのぶ心ち
から思ひくらべてよめる哥
人とゝもにかへらぬ子をしの
びてよめるなるべし

あはれとぞ人々いふ思ひいでぬことなくおもひこひし
きがうちにこの家にてむまれし女子のもろともにか
へらねばいかゞはかなしきふな人もみなこたかりて
のゝしるかゝるうちになほかなしきにたへずして
ひそかにこゝろしれる人といへりける哥

むまれしもかへらぬものをわが宿に小松のあるを
みるがかなしさとぞいへるなほあかずやあらん又かくなん

諸本かくの二字なし

古伏れぶ記拾

市岡翁著
校註古伏記追考 全

文政三年 辰冬

書林

京都 出雲寺文治郎
大坂 河内屋太助
江戸 前川六左衛門
名古屋本町拾丁目 松屋善兵衛